

第20回村上記念「胃と腸」賞は 測上忠彦氏らが受賞

今回で第20回を数える村上記念「胃と腸」賞の贈呈式が去る7月19日、エーザイ本社ホール(東京)で毎月開かれる早期胃癌研究会の席上を借りて行われた。本賞は毎年「胃と腸」誌に掲載された全論文の中から選ばれる最優秀論文に授与されるものであり、今回は「胃良・悪性境界病変(Group III 病変)の長期経過からみた生検診断の問題点」(胃と腸 29: 153-168, 1994)が選ばれた。

当日司会の丸山雅一氏(癌研究会附属病院内科)の紹介で、受賞者を代表して測上忠彦氏(松山赤十字病院消化器科)が登壇した。「胃と腸」編集委員会代表の八尾恒良氏(福岡大学筑紫病院消化器科)は、こうしたフォローアップスタディを可能ならしめたことについて、普段の検査に手を抜いていないこと、コメディカルを含めた全体のスタッフの協力によって患者がずっと来てくれること、資料の整理がきちんと行われていることを挙げて讃え、賞状と賞牌を測上氏に手渡した。続いて医学書院社長金原優から賞金が贈られた。

次に選考委員を代表して多田正大氏(京都第一赤十字病院胃腸科)から選考過程の報告があった。受賞論文について、臨床の立場での取り扱いが混沌としている胃



受賞者の測上忠彦氏



八尾恒良氏から賞牌を受ける測上氏

◀選考過程を述べる
多田正大氏



▲満員の会場に挨拶する測上氏

良・悪性境界病変を、45症例の長期経過を追うことで、初回のバイオプシーでたとえ異型が低くとも vil-
lous pattern がみられるようなものは切るべきだと明確
にしたこと、呈示症例の画像がX線・内視鏡・病理と
も卓越したものであったこと、4年間にわたる丹念な経
過観察のすばらしさが特に評価される点と説明し、ま
た、胃の分野での受賞は8年ぶりということを考えても
敬服に値すると祝辞を結んだ。

受賞の言葉を求められて測上氏は、“松山に来て15
年、症例を1例1例大切にすることを続けてきた。今回
の受賞は、そうした地道な当たり前のことを続けた歴史
に対するものと極めて喜んでいる”と述べた。大学を離
れても人との出会いに恵まれ、今回の共同研究者の岩下
明徳氏と出会えたこと、また2人で故・白壁彦夫氏に激
励されたこと、受賞論文のきっかけなど思い出を交えな
がら、“消化管の形態診断学は、透視台が1つとカメラ
が1本あれば、どこでも、大体のことはできる。私の
仕事はそれだけです。今日、会場にも若い先生方がたく
さんおられるが、どこでも「胃と腸」賞は目指せるので
がんばってほしい。最後になったが多くのスタッフと直
接の恩師である八尾先生に本当に感謝する”と締めくく
り、満員の会場から拍手を浴びた。